続サウジアラビア紀行⑧

Wadi Sawawin

小 村 幸二郎

Ash Sharmah への空の旅

Jeddah からおよそ 850km 北方の Ash Sharmah まで いつもは5日ばかりかかって車を走らせるのだが今日は軽飛行機をかっての空の旅だ(第106図)

朝5時半にホテルを出ないと間に合わないのだが 至極のんびりしているお国柄なので そんなに朝早くから働いているのは空港勤務の連中か警察官ぐらいのものだ. だから タクシーをつかまえることは全く不可能に近い. 日頃仲良くしているタクシーの運転手のサイードに「明朝5時20分にホテルへ来てくれ」と 頼んではおいたが 「タイーブ・イムシュアラー (o. k. 多分ね)」という彼の返事の通り 本当に来てくれるかどうかは分かったものじゃない.

午前5時起床 5時20分にホテルの玄関へ出てみると昨日の約束に違わず サイードがニコニコ顔で待っている. 日頃は中々やんちゃなところがあるこの大男は時には借りてきた猫のようにおとなしくなる 一風変った男だ. それにしても今朝のご気嫌のよさはどうだ 浪曲家のような声で鼻唄を歌いながら せっせと荷物を車に積みこみはじめた.

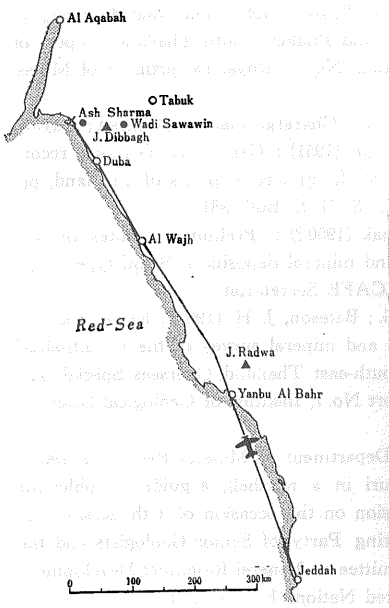
5時半にホテルを出て空港へ車を走らせた. ゆったりとした車の窓からささやきかける早朝の冷んやりした風が心地よい. 車も人の姿も見えず ホテルから空港までの間には人の気配を感じさせる家もない.

ホテルを出てから空港までは 早朝なので 車でわずか5分である. いささかねむそうな表情で銃を片手に立っている空港ゲイトの番兵に身分と行先を告げてゲイトを上げてもらい 整備工場に待機している鉱物資源局の調査用機まで荷物を運んだ.

夜明の明星がさわやかな光を投げかけている6時 機体を白に 主翼と尾翼とを真赤に塗った8人乗の1番機は カナダから来ている名パイロット Mr. Shaw に操縦されて 赤いランプを明滅させながら まだ明けきらぬ東の空へ消えていった(第107図).

私たちが乗る2番機は6人乗の Dehabiland Beaver であるが 今日は 野菜や果実などを大量に積載する都合上 後部シートの一つをはずしてある. 6時30分にパイロットのH氏が姿を見せた. 頑健そうな体駆の持主であるこの男は ヨーロッパでも最も詩情あふるる国に育った人に似ず 空の雷族とでもいうのだろうか 時々急降下したり 機体をゆさぶったりして楽しむ悪癖の持主だ.

鉱物資源局の飛行機を操縦するようになってからもう2度ばかり事故を起こしてはいるが 悪運が強いのか彼のホータイ姿を見たことはない. こういう人間を「憎まれっ子世にはばかる」というんだろうが 大事故を起こさず 仮りに事故を起こしたとしても自分自身が大したケガを負わないところをみると 事故の起こし方



第106図 Jeddah から Ash Sharmah への飛行コース

第107図 Jeddah 空港と調査地の間を連日飛ぶ鉱物資源局の専用機 デハビランド・ビーバー

？ がうまいのかもしれない． やがて 荷物の積載を完了し 整備員の手を借りて 整備工場から飛行機を押出した後で搭乗した．

エンジンの調子は至極良く セルー発で始動した飛行機は ゆっくりと前進して2番滑走路の南端に 機首を北へ向けて 待機した． この時間に発着する飛行機は鉱物資源局の専用機以外にはないので 所定の位置に着いて間もなく 管制塔からの指令で エンジンを全開して発進する． さすが単発の軽飛行機だけのことはあるわずか130mばかり滑走して ふわりと離陸した．
Jeddah から Al Wajh まではもう何回も飛んでいるので これから4時間半の飛行は睡気をもよおすほどに退屈である．

離陸してから間もなくアブホール海水浴場の上空を過ぎ およそ15分後には 左手に美しい珊瑚礁を見 右手に黒々と続く玄武岩の熔岩台地をのぞみながら 1500mの高度で北へ向かっていた．

Jeddah 空港の管制塔との連絡を終った操縦士は 突然 副操縦席に乗っている私に「本を読むから操縦しろ」といって 止め金をはずし 操縦桿を私の方へ バタンと倒した． 即座に「o. k.」とはいったものの 生れてこの方 無人の砂漠で自動車の無免許運転を何度かやった他には 飛行機を操縦する夢さえみたことのない私は一瞬とまどいながらも 「何事も経験 まかり間違っても墜落することはあるまい． 決められたコースをはずさないように 水平に飛べばいいさ」と自分にいいきかせて 操縦桿を握った． 操縦桿を手にしたことがまったくないとはいうものの 副操縦席で 始動 離陸 飛行 旋回 着陸などの操作を 何度も見ているので 操縦に関して完全に無知というわけではない．

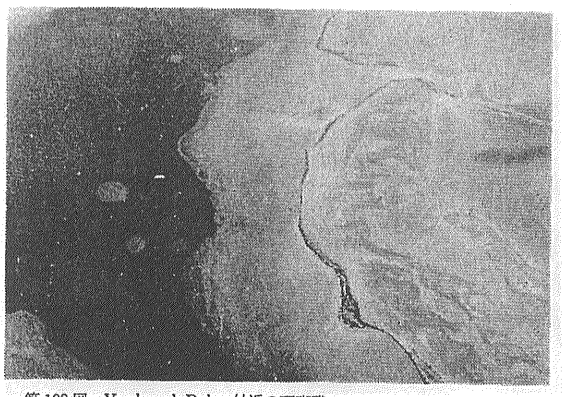
前面に取付けられている数多くの計器の全部に気を配りながら飛ぶことが不可能なことは分りきっている．
だから 私は とにかく 磁石の指針が指定方向からはずれないように注意し 水準儀をにらみながら 1,500mの指定高度で水平飛行をすることに専念することにした．

しかし $\frac{1}{200万}$ 地勢図と眼下の地形とで現在位置を確認しながらただ飛ぶことさえ初心者にはシンが疲れるのに 常時吹いている西風にあおられて機体がどうしても東の方へ流されがちなので 正常の飛行コースへ機体を戻すために絶えず操縦桿を操作しなければならないから気骨が折れる． 無風状態であれば 操縦桿を手離しても 自動装置でうまく飛べるんだけれども この高度ではそれも無理である． 操縦桿を手にしてからおよそ1時間の後の Yanbu al Bahr の町が姿を見せた． 港には2,000t 大の貨物船2隻が停泊している． この町の波止場から見た港は 結構広々としていて 大型船のすれちがいも至極容易なようにみえるが ここも例に洩れず 両岸には珊瑚礁が広く張り出している（第108図）ので それは不可能らしい． この町の上空を過ぎて間もなく機首を指定のN22°Wに向ける． 風が強くなり機体が東の方へ どんどん流されはじめた． この町のすぐ東側には 海抜1,814mの Jabal Radwa をはじめ Jabal Irdah・Jabal Jar など 高い山々が北北西—南南東方向に峯を連ねているので 油断するとたいへんだ．

いくら操縦が下手だとしてもこれらの連山にモロに機体をぶつけるへまをやるはずはないし また仮りに そのような危険が目前に迫った場合にはH氏が手を貸してくれることは分りきっているのだが つい緊張して 肩に力が入り 操縦桿を握る手にはぐっしょりと汗がにじみ出る． まるで酔っぱらいが千鳥足で歩いているように ジグザグに飛びながらも何んとか飛行コースからそれほどはずれずに北北西へ向かっているうちに 間もなく 気流の状態もよくなり 緊張がほぐれた頃 H氏が何かを見つけたらしく 突然に 「左へ旋回」といった．

水準儀をにらみながら機体を左へ40°傾けて大きく旋回する． 中々良い調子だ． 眼下には比高100mばかりの丘がゆるやかにうねっている． 彼は愛用の日本製ハーフサイズのカメラを取出してシャッターを切り「o. k.」といった． 機体を水平に戻して進行方向に向け 「何？」と聞くと 「大した物じゃない」という返事が返ってきた． これまでもう嫌という程 車や飛行機で この付近を通っている私は その被写体が 野獣を見張るためにベドウインが丘の頂に石を積み重ねて造った 望楼のようなものであることを十分に承知した上で彼に質問してみたのだが 彼はそれが何であるのかを知らなかったらしい．

Yanbu al Bahr を過ぎておよそ1時間の後には 緊

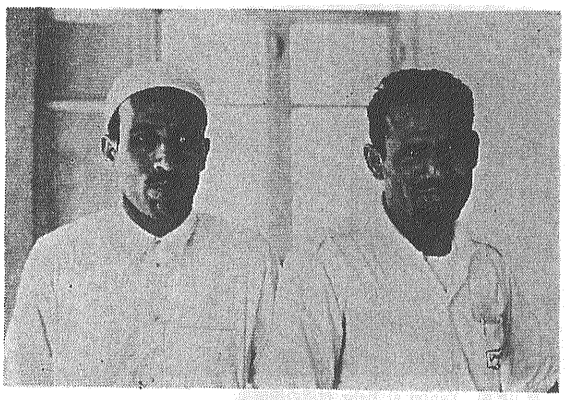


第108図 Yanbu al Bahr 付近の珊瑚礁
写真の右側約40%（黒い線から右）は砂漠で その他の灰色の部分は海中の珊瑚礁 陸地の白い部分は塩のかたまり

張感から解放されて肩の力も抜け　操縦にもようやく馴れて　眼下に展望される地質構造を読みとるゆとりが出てきた．　Um Lajj の町に近い砂漠の上空を　内心得意になって　今にも口笛でも吹きそうな良い気持で飛んでいた私は　突然　顔から血の気がなくなり　全身コチコチになるほどの緊張感におそわれた．　機体が　突然ガタガタ　ギシギシと音を立てて揺れはじめ　東の方へ流されながら　時々スーッと　奈落の底へ引き込まれるように落ちてゆく．　夏を過ぎればこの付近には砂嵐がないことを十分すぎるほど知ってはいても　突然に起こる気流の変化は決して気持の良いものではない．　まして Middle East Airline の旅客機が　46名の客と7名の乗員を乗せてダハラン空港に着陸する直前　砂嵐にあおられてアラビア湾に墜落したことを知っているだけにその怖さは格別だ．　隣の席では雑誌のグラビアを見ていたH氏が　緊張しきった私の横顔をチラッチラッと見ながら　ニヤニヤ笑っている．

このような悪気流は局部的に発生するのだろうか　まごまごしているうちに　機体の揺れはピタッと止まりプロペラの単調な音だけが再び耳をつくようになった．はじめて経験することでもそれに馴れるということは全く大切で　操縦桿をわずかに引いて機体を上げながら所定のコースに戻すまでにそれほどの時間を要しなかった．やれやれだ．　隣の大将は　それを見て　ウインクしながら「good」とほめてくれた．

Um Lajj を過ぎて給油地の　Al Wajh 町が遠くにかすんで見える頃　操縦桿をH氏の方へ戻した．　私にとっては生まれてはじめての　この空の旅は結構面白かった．　交通信号があるわけではないし　また　日本の空のように四六時中　各種の飛行機がぶんぶん飛びまわっているわけではなし　まったく快適だ．　これでは　自家用ジェット機を自分で操縦して副操縦席の夫人と共にゴルフ大会々場へ臨むアーノルド・パーマーならずとも



第109図　Al Wajh 空港に勤務する職員
左側の人物の顔は一般的サウジアラビア人の顔　右顔の人物の顔はイエーメン人に多い

あり余る財産を持っている連中が飛行機を買いこんで今日は東　明日は西と飛びまわるわけだ．　だが　日本で地質家として生きているかぎりでは　私が自家用機の手入れや飛行場探しに悩むことは絶対にない．

ある著名な占師によれば　昭和50年の日本は不景気の大波におそわれるということだ．　中古の小型飛行機ならば現在でも200万円位で買えるということだから　そのうち　地質家の中にも自家用機を買いこんで調査地近くまで一飛びとしゃれこむ人が出現しないとも限らない．そういう時期がもしやってきたならば　あるいは私なども　学会費の納入に悩むことも　学会費滞納のために除名されることもなくなるかもしれない．

くだらないことを考えているうちに Al Wajh 空港に無事に着いた．

私たちがはじめてこの空港に立寄った頃は　滑走路らしいものもなく Saudi Arabian Airline の国際線の旅客機さえ　海面から30mばかり高い珊瑚礁台地の上に物凄い砂塵を巻きあげて離着陸していたし　空港の建物らしいものもなく　気安め程度の吹流しと白いテントがポツンと立っていた．　だが　今はどうだ．　職員の顔ぶれはほとんど変っていないが(第109図)　小型ながらも空港ビルは完成し　コンクリートを張りつめた2本の立派な滑走路には誘導燈さえ備付けられている．

以前のこの空港の実態を知っている人の目を見はらせるような　急速なこの変貌の謎は何か？．　今更ここで説明を加えるまでもなく　本誌第161号と162号とを通読した読者ならば　容易にこの謎を解くことが出来る．

Al Wajh 空港で給油してすぐに出発した．　眼下に展開する山　丘　わずかばかりの緑がぽつんぽつんとみえる谷　砂漠を一直線に突切る一筋の道等々‥‥．　これらは　私にとってあまりにも想い出多く　そして　生涯忘れ去ることの出来ないものだ．

かつてはアフガニスタンの辺境に　あるいはヒンズークシ山脈の峻嶮に挑み　そしてまた　この人影まれな大地にたくましく挑戦した中沢次郎氏は　不幸にして病を得　勇途空しく　アラブの荒野に斃れた．

Wadi Sawawin のキャンプを出発して Al Wajh までおよそ 356km の砂漠の道を病苦に喘ぐ彼と共にたどった1966年5月10日　この日の想い出は　今も生々しく私の肺腑をえぐる　熱湯を浴びた私の右フトモモの約半分は　火ブクレになっていた皮膚が破れて　桜色の肉がむき出しになっていたし　背中は　毒蛾に刺されて　一面に真赤にはれ上っていた．

フトモモにのせた鞄の重みと車が揺れる度にズボンでこする時のヤケドの痛さに　時にはうめき声さえあげそうになるが　この傷も　中沢氏の苦痛にくらべれば　針小ほどのものだ　ズボンにシミをつくるヤケドの痛さに耐え　苦痛にゆがむ顔で力なく語る中沢氏と砂漠の道をたどりながら　私は　いけないこととは知りながら　知らず知らずの中に　華やかな南極観測隊のかなり満たされた生活状況を自分達の場合と比較していた．　たとえ病を得てもケガをしたとしても　僻地で業務に励む私達は差当っての手当さえ期待出来ない．　脳裏に去来する中沢氏との旅の想い出に耽っていた私は　右手に浮ぶ Hijaz 山脈の最高峯 Jabal Dibbagh を見て　現実の世界に戻った．　午前11時半　Ash Sharmah の海岸の着陸地点上空に達したが　いつもより時間が早い故か　迎えの車が見えない．　操縦士は　むーっとした顔で文句をいいながら　操縦桿を急に一杯に廻したからたまらない飛行機は　きしむような音を立てながら　左へ急旋回して　キャンプの上空へ向かった．

「またヤルナ！」と思った瞬間　テントを見た彼は日頃の悪癖を丸出しにして　ぐーっと機首を下げ　比高30mばかりの丘と丘との間に並び立つテントをなめるように　南から北へ　超低空で飛び去った．

キャンプで待機していた連中は不意の轟音にさぞ驚天したのだろう　Ash Sharmah のオアシスの上空をゆるやかに旋回する飛行機の窓越しに　彼等が一斉に飛び出し　砂塵を巻き上げるランドローバーをかって着陸地点へ急行する光景が手に取るように見える．　操縦士のにがり切った顔もようやくほころびた．　やれやれだ．

ニタニタ笑いながら雑誌のグラビアを見ているかと思うと　不意に手を出して　私に托した操縦桿を前後に動かしては機体を上下にゆさぶったり　機体をほとんど垂直近くまで傾けて急旋回したり　飛行中にエンジンを停止させたり　時には頭上すれすれに飛んで待機している人達を横転させてはケタケタ笑ったり　曲技飛行まがいのことを楽しむ雷族との4時間半にわたる空の旅はともかく無事に終った．

Ash Sharmah のキャンプ

紅海に臨む着陸地点から Ash Sharmah のオアシスまでの距離は 8km だ．　Wadi Ash Sharmah の入口に位置するこのオアシスには　水がかなり豊富なので　ナツメヤシの林の他にトマトや西瓜畠などがあり　農夫が鍬を振る姿もみられる（第110図）．　そして　このオアシスは　私たちへの水や新鮮な野菜の供給地でもある．日本から持参した大根の種が実り　私たちの食膳を賑わしてくれたのもこのオアシスだった（第111図）．　しかし　いくら水が豊富にあり　多くの井戸があるとはいっても　必要量の水を自分勝手に汲み取ることは出来ない．人間の生死の鍵となる水井戸のようなものは　あくまでも国の所有に帰するらしく　ここで水を汲むために　私たちは Duba のプリンス(第112図)から使用許可証を貰った．

このオアシスを通って東へおよそ 6km の地点に　私たちは　Ash Sharmah 区域の鉄鉱床調査の基地としてキャンプを設営した（第113図）．　ゆるやかにうねる北高30～70mの丘の間には細かい砂が厚く溜っており　テントはその砂地の上に立てられた．

4月を過ぎると　容赦なく照りつける太陽の強い光と焼けた砂の熱とで　日中のテントの中はまるで蒸し風呂のような暑さだ．　おまけに毒性が一番強いといといわれる黒光りする大きなサソリが出現したり　時には　猛毒をもつ砂漠蝮が姿を現わす．　千客万来とまではいかないが　そうした招かれざる客も現われないではない．午前5時半　砂漠のキャンプではもっとも心地よく　前後不覚にねむれる時刻だというのに　騒々しい声に眠をさまされた．　ふだんなら人夫達もまだねむりこんでい

第110図a　Ash Sharmah オアシス

第110図b　Ash Sharmah オアシスの農夫
オアシスでは　写真中央下方にみられるように　水路が設けられていることが多い

第111図　Ash Sharmah のオアシスの一角で実った20日大根

る時刻なので　きっと異変が起こったのだ．　パジャマ姿のまま表へ出てみると　左手で右腕を押えた人夫を抱きかかえるようにして人夫達がこちらへやってくる．

「アンタ・アムルト・イシ（何をしたんだ）？」

「アガラブ（サソリ）」

その男の右腕を見ると　赤黒い肌の一部に　出来たてのヤケドがみえる．　サソリに刺された直後に　応急処置として火のついた木片を押しつけてヤケドをつくったのだ．

連れの男が手にした小枝に突刺されたそのサソリは黒光りする猛毒性のもので　体長 7cm 以上もあった．

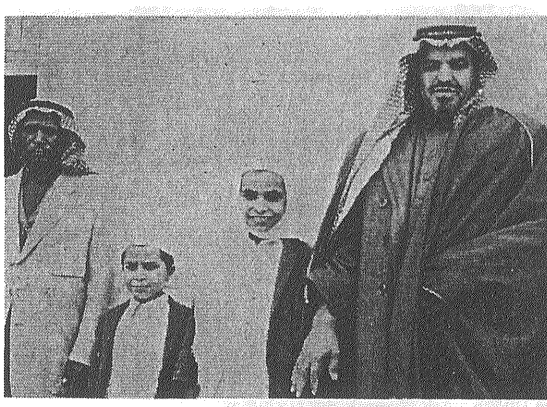
この種のサソリに刺されると呼吸が困難になるのかその人夫は　ハーッ　ハーッと　断続的に　肩で大きく呼吸をしている．　彼自身はもう何回もサソリに刺された経験があるのだが　やはり恐怖心は強いのだろう　その表情には　ありありと　怖えと心配とが現われている．そのまま放置しては生命の危険にさらされる可能性もあり　人夫達の強い希望もあって　その男を毛布でくるみ中型トラックに乗せて 90km ばかり離れた Duba の病院へすぐ出発させた．

Duba の病院にはエジプト人の医者がおり　簡単な外科手術は可能だ．　その人夫は　手当がよかったのかその後3日ばかりで回復したが　もし　免疫性のまったくない私などがこの大型のサソリに刺されたならば　たとえ病院で治療を受けたとしても　完全に回復したかどうかは疑問である．　調査中に　万が一　サソリに刺された場合には　刺された所をナイフで切って出血させライターかマッチでその傷口を焼いてヤケドをつくった上で病院へ行くのが手取り早く　しかも　もっとも良い手当の方法だ．

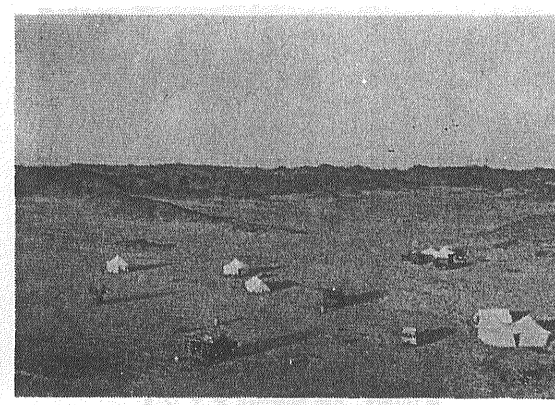
また　ケガをして出血量が割合に多い場合　日本での調査中の出来事ならば　早速　手拭かバンドで止血する方が良いのだが　アラビアのような砂漠地帯で　もしそのような事故に遭遇した場合　気温が自分の体温よりも高い場合には　そのような処置をすると　しばった所から先の血液が腐る可能性が強いので注意しなければならない．　日常起こりうるこうした事故に対するこの程度の知識をもっておくことは決して損ではない．

思いがけない事故が発生して睡りからさめたせいか再びベッドにもぐりこむ気にもなれず　ねむい目をこすりながら　作業服に着換えて　朝食を待つことになった．長い間キャンプ生活を送っているとまったくいろんなことがある．　思いがけない事件が突発的に起こるかと思えば　取るに足りない些細なことが原因で人夫達の間でいさかいが起こることもあり　思わず吹出さずにはいられないようなことも起こる．　しかし　自分の本業の方は　人並の探究心を失ってはいないと確信してはいるものの　どうしても　単調さから脱け出せないことが多い．

Ash Sharmah 区域には　延長約 6km　幅約 600m のはんいに　層状鉄鉱床が断続的に露出している（第114図）．　草木が生えているわけではないし　一望千里　地質や鉱床の状況がはっきり見えるわけだ．　それだけに



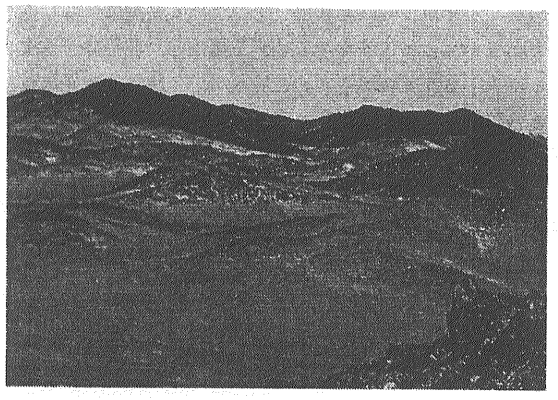
第112図　Duba の為政者と子供達と従者
堂々たる体軀がいかにも統治者としての風格を表わしている



第113図　Ash Sharmah のキャンプ風景
前方の丘陵地帯が層状鉄鉱床の賦存区域である
テントは左から　筆者用・食堂兼食糧貯蔵用・調理場兼コック用・人夫用・運転手用　筆者用のテントの左手前に立っているのはナツメヤシの葉で囲んだ水浴場

ゴマカシがきかない．　草木が茂り　露出が著しく少ない地域の調査を行なう場合　たとえば　岩脈を地質図上に表現する際には　多くの場合　ミミズか短冊のような形に画かれるものだが　露出100％近いこの国ではそうはいかない．　幅２ｍ前後の岩脈が数10kmも続くかと思えば　延長わずか数ｍの岩脈も少なくない．　断層が丸見えなら褶曲も丸見えだ．　従って　うまくごまかそうなんて考えはほとんど通用しない．　それだけに結構骨が折れるというものだ．　ふだんは午前７時半から８時頃キャンプを出て調査を行い　午後２時頃に帰着するのだが　６月頃になると　木蔭の一番涼しい場所でさえも46℃を越えるので　直射日光下での長時間の作業を続行することは肉体的に困難である．　従って　こういう時期には　日中の暑さを避けて　午前中と午後３時以後の比較的涼しい時間を見計って調査に精出すことが少なくない．

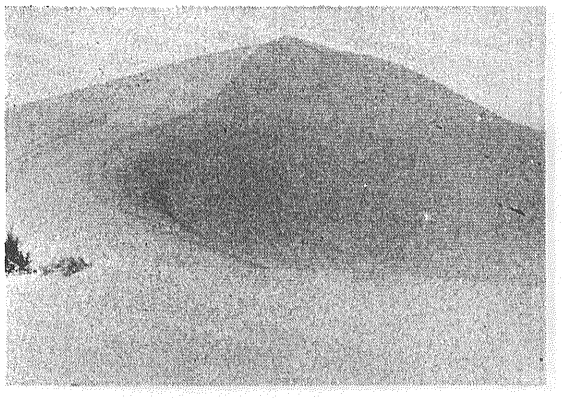
あくまでも青い大空の下　東には　Hijaz　山脈の前縁を形造る淡いオレンジ色の花崗岩の峻嶮が迫り　西の彼方にはこの大地とアフリカ大陸とを分つ紺碧の紅海が広がる．　そして　この両者にはさまれた幅 6km ばかりの丘陵地帯には黒々とした鉄鉱床が大小様々の形で断続し　谷を埋めた白砂と丘を切るピンク色の岩脈とが色どりを添えている．　丘の一角にポツンと見える大きな砂丘は　細かい砂粒が風に運ばれて積りに積って出来たものだが　何故そこにしかないのだろう（第115図）．　砂丘の表面に波打つ風痕と小さな生物の足跡が可愛くそして美くしい（第116図）．　砂漠はやはり生きているのだ．　こうした景観の中で　今日もたった１人で　幾つもの丘を越えながら　日没近くまで調査に精出した．　死の世界を想わせるような静寂の中に立った時　自然の余りの偉大さに何かを考えさせられるかと思えば　丘の頂を鳴らし砂を捲き上げる突風に　思わず不気味さを覚えさせらるるのもたった１人で歩いている時だ．



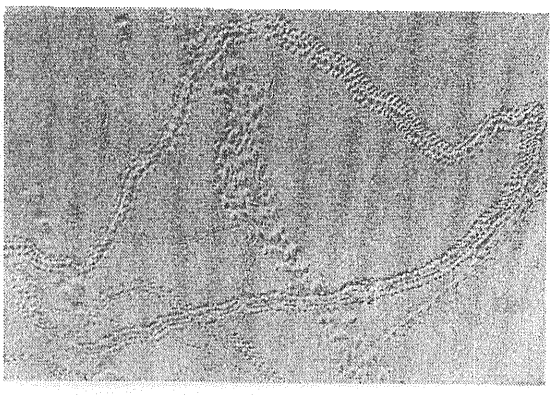
第114図　Ash Sharmah の鉄鉱床（黒い部分）
この区域では鉄鉱床の大部分が輝緑岩に貫かれ　その上にルーフペンダント状にのっている

西の空が燃え　大きな太陽がゆっくりと紅海に沈む頃丘のふもとは暗くそして頂はオレンジ色に映え　冷い風がしのび寄って来る．　皮ジャンパーを着てはいても暑さをまったく感じない位に気温がぐーっと下った．　今日の作業はこれで終りだ．

夕食後間もなく　ベドウインの若者が息をはずませて私たちのキャンプへやってきた．　ついぞ見掛けない顔だがお茶を飲みに立寄ったにしては様子が変だ．　来た目的を質問すると「1kmばかり離れた場所で野営の準備をしていた折　仲間の１人が　邪魔な大きな石を押転がそうとしたとたんに　右手をその下でトグロを巻いていた砂漠蝮に咬みつかれたので車で Duba の病院まで送って欲しい」と頼んだ．　かつて私が行を共にした人夫の１人がコカコーラのビンの割れ口で右手のひらをざっくり切った時　すかさず砂を傷口に擦りこんで　１週間ばかりで完治したことがあったが　いかに日頃荒療治に馴れているベドウインとはいえ　蝮に咬みつかれてはそう簡単には治らない．　この種の蝮に咬まれた場合普通の人ならば２時間もそのまま放置すると死ぬ可能性が



第115図　Jabal Ash Shati の近くにある当地域唯一の砂丘
高さ約30mで常時西風が吹いているので東側(写真右)へ向かって半月状をなしている
砂漠の植物(左の黒い部分と砂丘の中腹に点在する黒い部分)は　水気のまったくないこのような砂丘にも生えていて　その生命力のたくましさをまざまざと見せつける



第116図　砂丘の表面にみられる生物の足跡
この写真にみられる線状の模様は小鳥の足跡　左下に丸くみえるものは兎の足跡
時にはサソリや蝮が這った跡がみられることもある

あることを知っていた私は　念のため人夫達に「もし車を出さなかったらどうなる？」と聞くと　彼等は「うまくいって片腕を切断です」と答えた．　仕事に関係あること以外に車を使うことは決して好ましくないのだが人の生命にかかわることとあっては　そう固苦しくばかりは考えておられず　すっかり精気を失ったケガ人を毛布でくるんで車に乗せ　Duba（第117図）へ急行させた．

その翌日　運転手だけが帰ってきたので　ケガ人の処置について聞いたところ「一応の応急手当てをしたが　Duba の病院では万全の治療が出来ないので Jeddah の病院へ行くことになった」ということだ．

この事件が起こってから２週間ばかり過ぎた頃　ケガ人と同行したベドウインが　仔羊を１頭つれて　ひょっこり　私達のキャンプへやって来た．　陽焼した彼は「ケガ人は　Duba の病院へ急行して手当を受けたのがよかったらしく　Jeddah　の病院で１カ月ばかり治療をすれば完治するそうです」と　にこやかに語った．　日頃銃を使う彼等にとっては　腕の切断を免れたということは私達の想像以上の喜こびにちがいない．　本当によかった（第118図）．

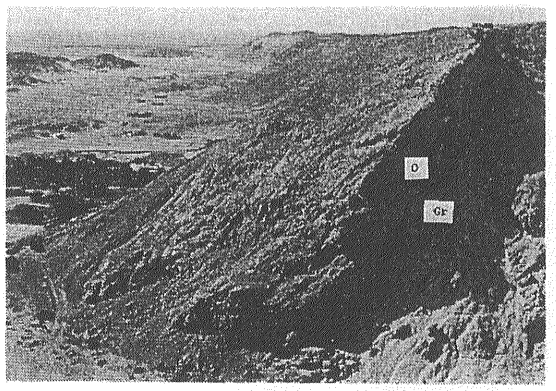
何世紀にもわたって文明社会から遠ざかって生きてきたこの国には　秘められたものが余りにも多い．　目まぐるしく変貌する現代社会の片隅で骨肉相食むいまわしい事件が繰り返されていることは　まるで日常茶飯事のようにさえ　私たちの脳裏に強く焼きつけられているような感じを受けるが　人間対人間のいさかいがきわめて少ないこの国で　生命にかかわるいさかいが起こると異常なまでの恐ろしささえ覚える．

目には目　牙には牙という対立感情はアラブの先天性のようなものだということを知ってはいても　いざそういう事態が起こると　その環境がきわめて平和であるだけに　一層の恐怖心をそそる．

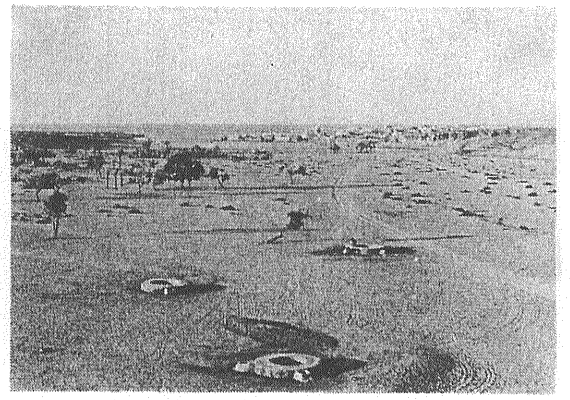
1967年２月下旬のことだった．　調査もそろそろ終りに近い日の夜10時頃　１台の自動車が　私たちのテントの前に　急ブレーキの鋭い音と共に停り　３人の男が険悪な顔付で　テントへ入ってきた．　このキャンプからおよそ 70km 上流へ遡った所にある Wadi Sawawin のキャンプからきた連中だ．　人夫や運転手も集まり騒々しい中で会話がはじまった．

「どうしたんだ？」
「この若者をすぐ Jeddah へ帰さないとベドウインに殺される」
「何故だ」
「２年前にこの若者が友達と一緒にベドウインのテントに立寄りテントの主とお茶を飲んでいた折　些細なことから口論がはじまり　友達がその主を誤って死なせてしまった．　死んだ男の父親が２時間ばかり前に Wadi Sawawin のキャンプへ来て今晩は泊るので　もしこの若者がその父親にみつかったらきっと殺される」
「お前が殺したのでなければ大丈夫だ．　今晩ここに泊まれば殺されることはない」
「駄目です．　Jeddah へ帰らせて下さい」
「Duba まで逃げても駄目か？」
「駄目です」

この若者は恐ろしさにワナワナとふるえ　その顔からは血の気が失せている．　遂に意を決して　調査用ジープにこの若者と屈強の人夫を乗せ　水と食料と 4,800 円（60リアール）を持たせて間もなく Jeddah へ出発させた．　その直後 Wadi Sawawin から来た車の運転手と人夫に　「今晩はそのベドウインを十分に見張って事故を起こさせないよう　不寝番をおけ」と命じて　キャンプへ帰した．　このことがあってから２日後に　Wadi Sawawin のキャンプを完全に徹収した連中が Ash Sharmanh のキャンプへ到着し　何事も起こらなかったことが判った．　彼等の話では　そのベドウインはかなり老令だったということだから　息子の仇を討つなどということはすでに念頭になかったのかもしれない．　それに



第 117 図 a　Duba の背後の丘を形成する花崗岩(Gr) とその上にのる古い珊瑚礁(c)



第 117 図 b　紅海に面する人口約 6,000 人の Duba の町
手前の井戸はトルコ時代に造られたもので　直径約 4 m
水面までの深さは約 7 m である

してもまことにぶっそうな所である.

Wadi Sawawin キャンプ

Ash Sharmah のキャンプを出て Wadi Ash Sharmah に沿って東へ進むと　ナツメヤシの林が尽きる頃　ドムの木(第119図) の林がみえてくる.

ドムの木は　必ず2股に枝を分かつ奇妙な習性をもっており　ナツメヤシと同様に　夏のはじめ頃になると馬鈴薯大の実をつける.　多くの果実はそれ独特の香りややわらかな実に含まれた果汁の味とが賞味されるものだが　中身を捨てて外側を噛るようになっているカチンカチンのドムばかりはとても私達の口に合う代物ではない. 果汁らしきものはまったくないし　口にする部分は硬い繊維ばかりだし　唯甘いだけがとりえだ.　その甘さの正体を知ろうと思ったことも何度かあったが　遂に分からずじまいだ.　すべての物資に乏しいこの国ではこうした物も愛好されるのだろう　大の男や子供達が　いかにもうまそうに　ドムの実をガリガリと噛んではペーッペーッとその硬い繊維を吐き出している姿がしばしばみられる.　ダムの林を通りすぎると　突然 Jabal Ash Shati が遠くに姿を現わす (第119図).

青い空に突き刺さるようなたたずまいを見せるこの山は　一きは目立って美しく　眼を奪うに十分だが　まるで鉾を連ねたようなその頂と山肌はそれに挑むすべてのものを強く拒みつづけているようだ.

ダムの林を過ぎると　谷は　一度蛇行して　再び東へ一直線にのびている.　これから先は　断層谷として知られた Wadi al Arnab (第120図)だ　"兎の谷" と名付けられたこの谷には　名のごとく　野生の兎や鳩に似た鳥が多く　ここを旅する人達の猟銃の音がこだますることが稀ではない.　道はなく　砂と大きな石がごろごろしている乾き切った谷底を右に左に揺られながらおよそ70km を走り抜け　2時間後に Wadi Sawawin のキャンプに着く.　海抜 580m　嶮しい山々に抱かれて広がる平原の一角が1年半にわたる私達の調査の基地の一つとなった (第121図).

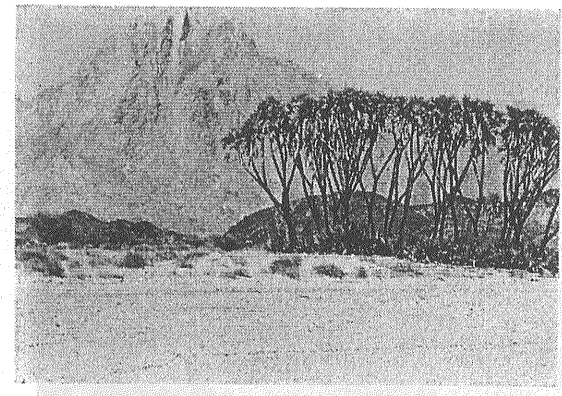
Hijaz 山脈の最高峯であり　また　狼の巣として知られる Jabal Dibbagh(2,350m) (第122図) に近いこのキャンプは　村里から遠く離れているので　付近にテントを構えるベドウイン以外には訪ずれる人は殆んどない.

ゆるやかにうねる平原のやや小高くなった所に位置するこのキャンプは　前ぶれもなく突然に襲って来る豪雨がひきおこす濁流を避け　そして　狼・ハイエナ・鹿などの野生動物を発見するのに便利だ.

このキャンプからサウジアラビア北辺の要衝である Tabuk の町までは直距離にしてわずか 80km にすぎない.　しかし　足を頼りに歩き続けるならばいざ知らず車でここから Tabuk まで直線的にたどりつくことはまったく不可能なのだ.　Tabuk の町が位置する Nejd 高原は海抜 1,000m 前後であり　そして　この高原の西縁部は Wadi Sawawin 付近で比高 400m ばかりの断崖をなして車の通行を妨げている.　そのために　ここから Tabuk へ行く場合には　一たん紅海へ出て北上しおよそ 400km の道程をたどらなければならないわけだ. 自然は　ここでも　その猛威の前に人類が屈従することを強いる.　しかし　変転きわまりない中東状勢を思う時　北辺の守りを固める軍事基地 Tabuk と紅海沿岸とを短距離で結ぶ重要路線がない現在のままいつまでも放置されることはなかろう.　そして　もしもそのような道路が建設されるとすれば　地形的にみても　また　経済開発の面からみても　Tabuk から Wadi Sawawin を経由して Duba に至る経路が考えられそうである.

Wadi Sawawin 地域を中心とするサウジアラビア北西部の巨大な鉄鉱床が一躍して脚光を浴びるのは　あるいは　この道路の建設と機を一にするかもしれない.

第118図　Wadi al Arnab の南方で出逢ったベドウイン
左側の老人は　第1次世界大戦当時に活躍した T. E. ローレンスと逢ったことがあると語った
右側の男が口にしているのは石作りのパイプ



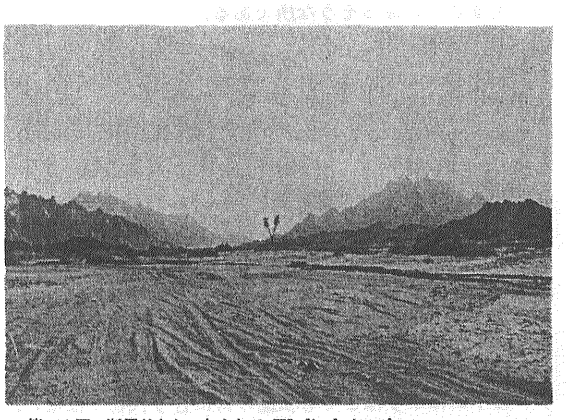
第119図　ドムの木の後方に聳ゆる花崗岩の山 Jabal Ash Shati 谷からの比高は約700m である

海抜580mのこのキャンプ地は Jeddah や Al Wajh にくらべれば 湿度が低いのでしのぎやすくはあるがそれだけに寒暖の差がはげしく 冬季は0℃を下回ることが珍しくない. キャンプでは結構暑くても 山の中腹に登ると風は冷たくなり 頂上近くでは寒さを感じるようにさえなる. まったく厄介なところだ.

いつものことながら高原の早朝は実に気持がよい. 冷んやりと澄み切った空気を胸一杯に吸って今日も一日がはじまる. 午前7時に朝食をとり8時前後に調査に出かける. 測量班の1人は 緑色のジープをかつてキャンプの背後に広がる砂漠を越えて 測量基点の海抜高度を決めるために紅海へ向かい 他の1人は 真紅の中型トラックに乗って 調査地域東端部付近に測点を設定するために出発した. 地質班は キャンプから約6 km はなれた Wadi Sahaloola で車を降り 海抜1,000 m 比高370m 山腹の傾斜20～40°の山の頂上を目ざして調査にかかった.

同行の人夫2人はマツターラと呼ばれる水袋と試料袋を持って後に続く. 巨大な岩塊が今にも崩れ落ちそうに積重っている崖錐を 一歩一歩 注意深く登って行くわけだが 先頭の者が 誤って この岩塊を1個でも転落させたら最後 後続者全員即死の惨劇が起りかねない. 手足をかけるべき岩塊の安定性を一つ一つ確かめるようにして登って行くこの行程は 2時間ばかりの緊張の連続の後に ようやく終った. しかし 頂上はまだ遠く私達の挑戦を拒むかのように 天に突きささっている. 崖錐の最上部 ほっと一息ついたそこは 車を降りた場所からわずか150m の高さにすぎない.

ここから頂上までの山腹の傾斜は30° 以上で所々オーバーハングしており 登るだけでも楽ではないのに 地質鉱床調査を目的とする登頂だけに一層骨が折れる. 時には 商売道具のカメラや図板やハンマーさえ邪魔になり 投げ捨てたくもなるが そうすることもならず



第120図 断層谷として知られる Wadi al Arnab
2段になった谷の堆積物の状態がはげしい水流があったことを示す

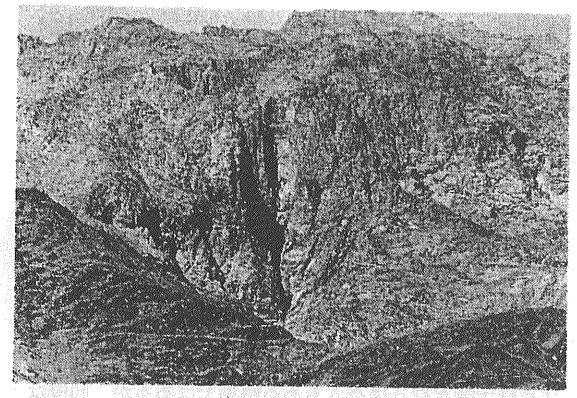
ハンマーを腰のバンドにさして 垂直に近い岩肌をじりっじりっと登って行く. 日中の酷暑と夜間の異常なまでの冷えこみによって 急激な膨脹と収縮とを長い間にわたって経験してきた岩肌は 非常にもろくなっている部分があるのでとても危険だ.

もしも手をかけた岩が崩れるか または足元の岩が崩れ落ちでもしたら 身体は 刃物のように鋭くとがった岩角で打ちくだかれ ずたずたに切りさいなまれながら谷底まで一気に転がり落ちて行くにちがいない. 頂上をきわめなければ自分の使命を果たすことが出来ない責任感と転落の恐怖とで 緊張し しっかりと踏まえた足がガクガクとふるえるのをがまんしながら 注意深く石を叩き 頂上を目ざして必死の努力を続ける. このような作業は 休日を除いて 少なくとも一日一回は行なわれる. 12時30分 ようやくたどり着いた頂上は長さ10m余り 幅3mばかりの平らな部分をもつだけで それに続く尾根は槍の穂先のように尖っていた(第123図).

深くえぐられた Wadi Sadr (第124図) を通って紅海から吹寄せてくる風は この鋭い山頂をならし 私達の

第121図a Wadi Sawawin のキャンプ風景
後方の高い山は Jabal Dibbagh(2,350m) その手前の黒い山は鉄鉱床

第121図b Wadi Sawawin のキャンプ
長期間のキャンプに備えて野菜畠を作っている人夫



第122図　Hijaz 山脈の最高峰としてまた狼の巣として知られる Jabal Dibbagh (2,350m) とその大絶壁　手前の暗色部は先カンブリア紀の低度変成岩類で　これを貫く花崗岩が Jabal Dibbagh を形成している　谷から頂上までの比高は約 1,600m

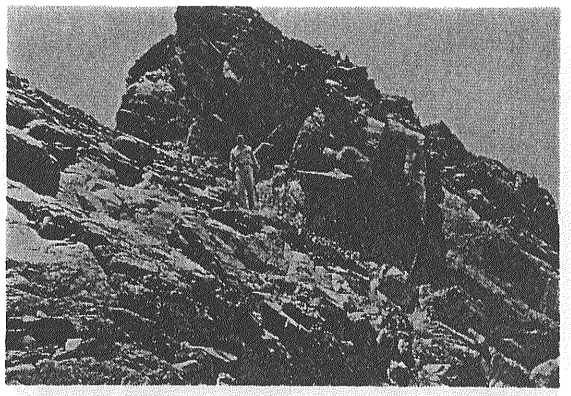
疲れ果てた身に一時の安らぎを与えてくれた．　しかし荒涼とした四辺の景観とそそり立つ山々は　これからの調査活動に精力的に挺身するであろう私達に　名状し難い辛さと苦しさを強いずにはおかないかのように　大きく立ちはだかっていた．　人影はなく　山の峯々をならす冷たい風は止みそうもない．

夜更けの厳寒に耐え　日中の酷暑の中で自然のきびしさに挑む日々を送る自分を見つめる時　苦しさの後のこのような安らぎの一時は　時には非情なまでに冷酷な自然のなせる業との静かな対決の時であり　その征服に策をめぐらす時でもある．　大きく吐き出された紫煙は瞬時にして　姿を消した．

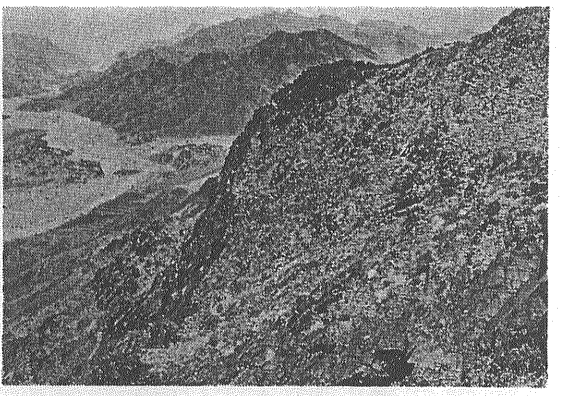
小休止の後　私達は尾根伝いに調査をはじめたが　立上ってから間もなく　私は打ひしがれたような気持ちになった．　そこには　この山に登りはじめてから頂上にたどりつくまでの疲労と恐怖心とをまるであざ笑うように　所々に乾き切った羊の糞があり　一部には黒々とした焚火の跡が歴然と残されていた．　ベドウイン　それも　羊を連れて餌を求めて歩くことが女性の仕事であれば　裾をひきずる真黒のアバヤを纏った女性に違いない．この山の頂には一本の草さえ生えていないので　何を目的にベドウインの女性がここまで登ってきたのかは分からない．　私は　そういうことを詮策する前に　きびしい自然条件の中で強く生き抜く人々のたくましい生命力を強く感じた．

登りがきつければきついほど　山を降りるのはむずかしい．　頂上付近を調査した後　私は　はじめてこの国へ来た同僚２人と人夫を山頂に残して　下降ルートを探すために反対斜面を降りはじめた．　頂上からおよそ100m　全神経を手と足に集中して降り立ったそこには幅15mばかりの鉄鉱層が高さ20m余りの絶壁を造って非情にも　私の行手をはばんでいた．　絶対絶命　しかし私はあきらめなかった．　その切り立った崖のフチに幅40cm　ばかりの廊下のようにはり出した部分を見出した私は　そこを降りようと試みたが　強風に災いされて進むことが出来ない．　止むを得ず腹這いになって少しづつ身体をずらしかけたが　やはり　風で身体がもち上げられそうになって先へ進めず　遂に　このルートを降りることを断念せざるを得なかった．　止むを得ず山頂へ戻り　同僚と共に　尾根沿いに大迂回して　反対側の谷へ降りたのだが　その時には　すでに　作業終了時刻を過ぎていた．　２時40分にキャンプに帰着したが測量班はまだ帰っていない．　「仕事の区切りが悪くてきっと残業しているのだろう」と思いながら３時まで待ったが　いささか心配になり　パン・ビスケット・ジュースを持って迎えに行くことにした．

キャンプから 10km ばかりの地点で　故障で立往生している赤いトラックを見つけ　全員を収容してキャンプへ戻った．　他の１班はまだ帰っていないので　その足で　砂漠を越えて　紅海への道をたどった．　砂漠を一気に走り抜け　花崗岩の山を越え　キャンプから 27km



第123図　Wadi Sawawin 鉄鉱床の一部
写真の斜右上半部が鉄鉱床で　この部分の厚さはむしろうすい方である



第124図　Wadi Sawawin の山の頂上から Wadi Sadr を見る
写真中央の黒い部分は鉄鉱床　谷に見える小さい丘は高品位の放射性鉱物を含む花崗岩よりなる

離れた谷で目ざすジープを発見した．　パンとジュースを早速与え　「故障？」と聞くと「予定以上の距離を走ったためにガソリンがなくなった」という返事が返ってきた．　作業時間中にこうしたことが起った場合　一応運転手に文句をつけるところだが　時刻が時刻だけにそれはまずいので労をねぎらうだけで終りだ．

乗っていった車から早速ガソリンを抜いて給油し　やれキャンプに戻れると安心した瞬間　人夫が1人足りないのに気がついた．　聞くと　キャンプへ救援を求めに出発してからもう30分以上も過ぎているという．　しかし変だ．　紅海とキャンプを結ぶいつものルートを走ってきた私の車は　途中　人影をまったく見なかった．とかく近道したがる連中のことだから　その人夫がこのルートをはずれた近道を行ったことを予想したが　とにかく　来た道を引返すことにした．

キャンプへ戻ってみると案の定その人夫は帰っていない．　水も食物も持たずに　疲れきった身体で　今頃はキャンプへ向かって必死に歩きつずけているのだろう可哀相に．　それから40分ばばりの間　車で走り　山の頂上へ登り　谷間を歩いたがみつからない．　そしてキャンプ近くまで引返し　まったく別のルートに入ってからおよそ15分後に　2kmばかり前方に人影を発見し全速力で車をとばした．　夢遊病者のように定まらない足元で　休もうともせず　歩き続ける27才の人夫 Abdul Abd・Al—Aziz　であることを確認し　車から飛び降りて「大丈夫か？」と肩を抱くと　この若者は「アナ・ターバン(私は疲れました)」と力無げに云って倒れそうになった．　鉱物資源局の中では最優秀の折紙付のこの若い人夫がこれほどまでに疲れた姿を　何回も彼と行動を共にした私は一度も見たことがない．　疲れ果てたこの若者の肩を抱いている中に　つい目頭がじーんとして不覚にも涙があふれてきた．

車に入り　水を一口飲んだきり　私が差出したパンにもジュースにも手を出さないこの人夫に　私は「お腹が空いているんだから食べろ」とすすめたが　彼は「空腹と疲労が激しい時にジュースを飲んだりパンを食べると身体に悪い」といってついに口にしなかった．

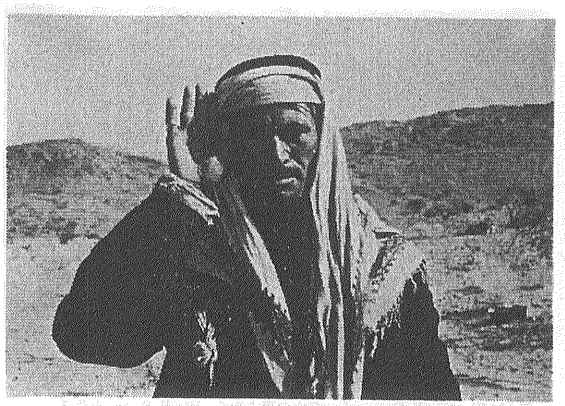
これは私達にとっても良い教訓の一つであろう．　とくにこうした砂漠のように身体の新陳代謝の激しい環境で激しい肉体労働に従事する者にとっては覚えておいた方が良いことの一つである．

ようやくキャンプに帰り着くことが出来た．　いつもならば午睡をむさぼる人もある時刻ではあるが　同僚は食事もせずに　私の帰りを待っていてくれた．　朝食後もう10時間余り　ご馳走を目の前にし空腹をがまんして私の帰りを待っていてくれた同僚の忍耐は　集団生活を営む者としてあるいは当然のことかもしれないが　人によっては中々出来ないことである．　それにしても　この日の昼食のうまさは今も忘れられない．　しかし　出来ることならば　このうまさを2度と味わいたくないものだ．

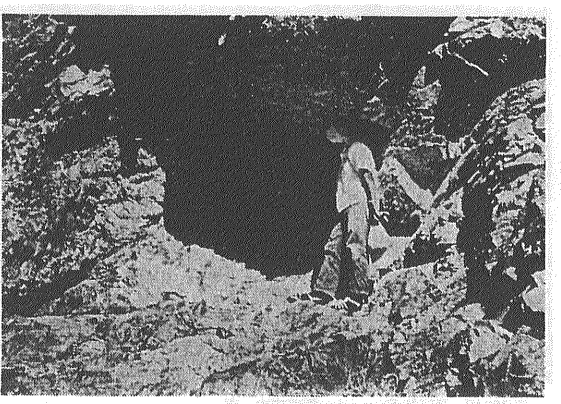
悲しい出来事

中国には「生在蘇州　住在杭州　食在広州　死在柳州」という古い諺がある．　「生れるなら蘇州　住むなら杭州　食べ物は広州　臨終の地としては柳州」が一番だということらしい．　もっとも　いろんな意味で挙国一致を叫ぶ現在のこの中国で　この諺がそのまま通用するか否かについては私の知るところではない．　しかし「京の着倒れ　大阪の食い倒れ」という諺が　世相の大きな変せんをよそに　古くから現在まで的を得て生きつづけているところをみると　世界でもっとも古い歴史をもつこの大国がいかに変貌を遂げようとも　この諺がまったく意味を失うほどに変り果てているとは思えない．

こうした中国の諺は　四季折々に麗花を咲かせ　作物を豊かに実らせる肥沃な平野と山水の美に恵まれた国土



第125図　Wadi Sawawin のキャンプをしばしば訪ずれたベドウイン　カメラを向けると緊張し　敬礼？　をした



第126図　Wadi Aynuna の上流で見つけたハイエナの穴　この穴は古い坑道ではないし　どうしてこのように大きな穴ができたのかよく分らない

があってこそ生れ　そして　受継がれたのであろう.

現在のサウジアラビアに　このような諺がもしあるとすれば「生れるならメッカ　住むならメッカ　食べ物はメッカ　臨終の地としてはメッカ」ということにでもなろうか.　あるいは　この中のどこかにメジナあるいはジエツダという言葉が入るかもしれないが　宗教即生活信仰即行動のイスラム教を信ずるかぎり　メッカと入れ代る場所は差当ってみつからないようだ.

7～8年前までは　アラブ暦の12月にメッカとメジナ詣での巡礼に来る他国のイスラム教徒の中には　メッカを目前にして　その道中で死に絶えた者が少なくなかったという.　そうした人々の多くは老軀にあるいは病魔に蝕ばまれた身に鞭うって　果てしない砂漠を　衰えた足でメッカを目ざして旅を続けたにちがいない.　聞くところによれば　そうした人々の中には　死を目前にして　一歩でもメッカに近ずくことに喜こびを感じて　這いずるようにして先へ進んだ人もあったということである.　1963年夏　私は　はじめてのサウジアラビア行を目前にして　メッカ詣での途中で死に絶えた人達のドクロが砂漠にころがっている写真を見て戦慄を覚えた.　現在の世の中に　しかも　死者の身を清め　白布で包み丁重に土葬する習慣をもつアラブの土地で　何故　このようなことが公然と起るのだろうか.　私はその写真を見つめながらいろいろと思い巡らせはしたが　適当な答えを見出すことが出来なかった.　今のサウジアラビアでこうしたことがみられないことを思えば　「これも御時世だ」と考えなければならないのかもしれない.

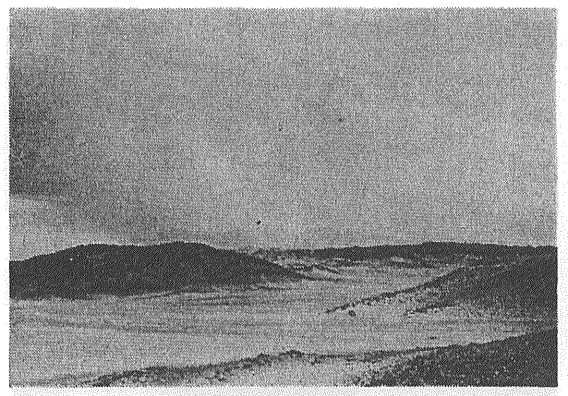
私達に恐怖さえ覚えさせるこのような出来事は　交通網の発達した最近では　まったくみられなくなったが　メッカ詣でに馳せ参じた数知れぬ大群集の中には　暑さと　疲労と　異様な熱気とで精魂尽き果てて　死ぬ人がいる.　精神的に渇き切っているかと思われる現在の世に生きている人の多くは　大金を投じ　長い日数を費やして聖地への巡礼に集まる人々を見て　異和感を抱くことだろう.　ヘルメットをかぶりゲバ棒を手にして暴れる学生の一人は「私にとって両親が死んだことはとても嬉しい」と語ったが　少なくともこのような人種にはイスラム教徒の存在と生活態度は　あり得べからざるものとして　批判軽蔑されるかもしれない.　しかし　もしもこのような人が水もなく　人影もまったく見えない大砂漠の中に放り出されたとしたら　体力の続くかぎり歩いた末に　彼は　何を思い　どうするだろう.

この荒々しい大地に生きる人々の真の姿を知ってもらうために　私は　ここに　幾つかの悲しい出来事を書かねばならない.　そのことを想い出す度に　悲しみと怒りとがこみあげて私を責める.

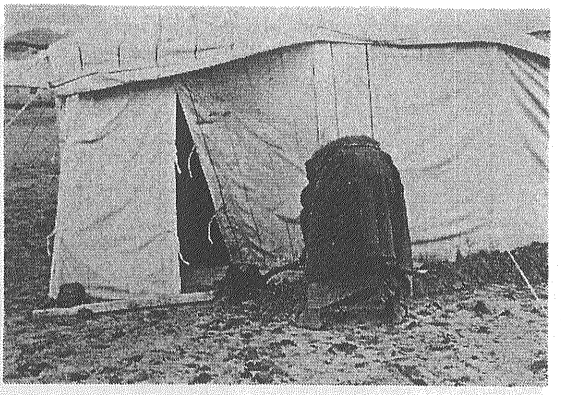
秀麗な山容を誇るJabal Harat・Jabal Shagh を従えたHijaz 山脈の最高峯 Jabal Dibbagh のふところに抱かれた Wadi Sawawin の奥にもベドウインが一時の居を構えていた.　アラビア半島中央北部の Nejd 高原に近いこの奥地は　10月から4月にかけて　雨量がやや多い.　従って　ラクダ・羊・ヤギの飼育によって生計を営むベドウインにとっては　これらの家蓄の飼料となる植物を割合いに得やすいこの区域は　ほんの一時とはいえ　格好の生活の場である.　彼等は　昼も夜も暇をみては　近くにキャンプしている私達の所へ遊びに来て　お茶を飲み　時には夜の更けるのを忘れて話しこむこともあった（第125図).

ベドウインの生活の場は　野生の動物にとっても　生きていくための生活の場となることが多く　Wadi Sawawin　付近もその例外ではなかった.　狼やハイエナがラクダや羊をねらって彷徨し　空には禿鷹が舞い　鹿が跳び　そしておそろしい毒蛇やサソリが出没する.

Wadi Aynuna　の上流地域の鉄鉱層を調査していた折　同行の人夫が　花崗岩の断崖の一部に　ハイエナの



第127図a　砂漠に降る豪雨
いつもはすばらしく美しい姿を見せる Jabal Ash Shati は雨雲と豪雨の柱に閉されて見えない



第127図b　雨に備えてテントの補強をする人夫
テントの囲りに溝を掘って水の浸入を防ぐ

巣を見つけた（第126図）．　ハイエナという動物は　腐肉だけを食い　生きている動物を食い殺すことはないと常日頃聞かされていたが　この人夫の話では　銃を持っていない人間に逢うと必ず跳びかかって喉に食いつき　Nejd　高原地域では年間60名前後の人を食い殺しているということだ．

何でも見てやろうという気持に勇気づけられて　私は尻込みする人夫をうながして　その穴の入口へ恐る恐る近づいて行った．　真昼間なのでその穴の奥にハイエナがひそんでいる可能性があり　もしものことがあってはたいへんなので　穴に近づくまでは　息を殺し　足音を忍ばせることが肝心だ．　互に目くばせしながら　私達は穴の入口へたどり着いた．　人夫のアブダラは　穴の入口付近を単念に調べた上で　ハイエナが穴の奥に居ないことを確信したらしい．　人間は欲が出るとまことに無鉄砲なことを考えるものだが　私もその例に洩れず　人夫をうながし　右手に握りしめたハンマーを唯一の武器にして　ライターの灯りを頼りに　穴の中へ入って行った．　穴の奥行は6mばかりあり　一番奥には灌木の小枝や枯草が散らばって吐気を催ほすような臭気がたちこめていた．　穴倉の主が不在だったからよかったもののもしこの時大きなハイエナがひそんで居たら　白昼の決闘が崖の上で展開され　悪くすれば　今頃は　三途の川の畔りで　イザナギ景気とやらで意を強くした渡し人足と　渡し賃のことでケンケンガクガクの大議論を戦わせていたかもしれない．

きびしい夏もようやく過ぎようとする10月8日のことだった．　Wadi Sawawin の奥にテントを構えていたベドウインは　幼子をテントに残して　男は薪を集めに女は羊を連れて餌を求めに　出かけて行った．　そして悲劇は彼等の留守の間に起こった．

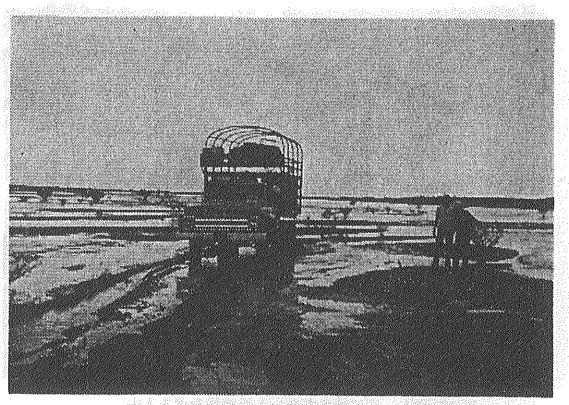
羊の群と共に歩きまわれる程成長していないベトウインの子供達は　大人達が働きに出ている間　テントの中やそのまわりで　石投げをしたり　手頃の石を塔のように積み重ねて遊ぶ．　玩具一つない子供達にとっては石が唯一の遊び道具である．

この日　テントに残された3才の男の子も　おそらく石を拾っては積み重ね　足を踏んばり　顔を真赤にして大きな石を転がしたりして　遊んでいたのであろう．時のたつのを忘れて遊びに熱中している子供の純真な心の中には　自分を毒する　恐ろしいことが待ちうけていることを予測するゆとりはなかったし　死の危険にさられている現実を見極める必要性も感じられなかった．静まり返った谷底で無心に遊ぶこの子供が手をかけた石の蔭には蝮がトグロを巻いていた．　それも黒光りする猛毒の蝮だ．

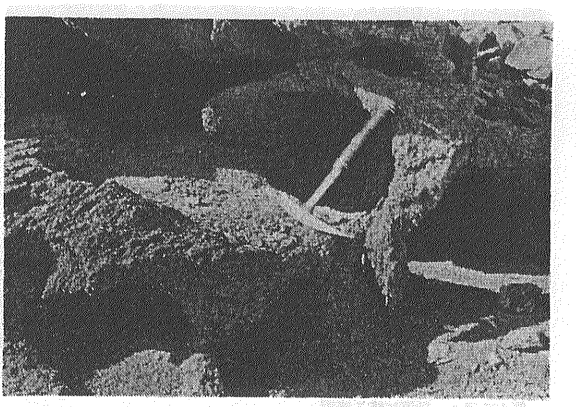
己れの棲家に手をかけられた蝮は　その子供の手に強く咬みついてしまった．　痛さと余りの恐ろしさに顔をひきつらせながら　この子は　声を限りに　泣き叫んだに違いない．　しかし　その声は　人の耳に入ることなく　唯徒らに　谷間へ消えていってしまったのだ．一日の労働を終えてテントへ帰った両親がそこで見たのは　変り果てた幼子の姿だった．

いかにベドウインとはいえ　いとしいわが子を残して働きに出ることを好むわけがない．　しかし　彼等にはそれを回避することはむずかしい．　彼等が　現在のまま自然に生きようとするならば　こうした悲しい出来事は後を絶たないだろう．　何と悲しい宿命をもった人達だろうか．

こうした悲しい出来事はいつどこで起こるか分らない．1966年11月9日　昨日までの快晴とはうって変わって夜更けから強い風がテントをゆさぶり　午前4時頃からポツンポツンと落ちはじめた大粒の雨が　テントを叩きはじめた．　風と雨の音で寝つかれずもんもんとしているうちに　食糧を蓄えてある無人のテントのことが心配



第128図　Nejd 高原の雨後（加藤完氏撮影）
砂漠地帯に激しい雨が降ると一面にヌカルミ状態となり　自動車は動きがとれなくなる．　こういう事態に遭遇したら慌てずのんびりと　乾くのを待つ以外に方法はない



第129図　"Cave granite" と呼ばれる古い花崗岩の典型的外観

なって　起き出してしまった.

懐中電燈の灯を頼りにキャンプを一廻りしたが別に異常はなさそうだ.　いつもならば　食事の準備をする位で身体を動かそうとしない人夫達も　山脈にかかる厚い雨雲と激しい雨とを見て心配になってきたのか　今朝は午前6時のお祈りの後　手分けして　テントの補強と雨水の浸入を防ぐために精を出している（第127図).

午前8時頃から風も雨も次第に激しくなり　調査予定地の Wadi Al Abbyadd 付近は豪雨に見舞われているらしく　日頃はキャンプからはっきり見える花崗岩の山はまったく見えない.　雨が降り止むのを待って調査に出かける予定で準備をしたものの　一向に降り止む気配はない.　午前11時になって　ようやく雨雲は去り　まぶしく強い陽ざしがキャンプを照らしはじめたが　これから調査に出かけても現地に着くのは12時頃なので　遂に　調査を休むことに決めた.

砂漠では　かなり強い雨が降ってもすぐに地中に染みこみそうなものだが　場所によつては　一面に泥水の流れにおおわれることがある（第128図).　しかし　このような流れも長くてせいぜい2日間位のもので　その後は元の乾からびた砂漠にもどる.

豪雨の後2～3日間は　Cave granite と呼ばれる古い花崗岩（第129図）地域やV字状の狭い谷が発達する地域の調査は　人夫達にとって　割合いに楽だ.　花崗岩のクボミの溜水や谷の一部に湧き出る水は　彼等にとっては　貴重な飲料水となると共にお祈りの直前に身を潔めるのに都合がよい（等130図).

激しかった降雨の後　テントの中で航空写真の判読に精を出していた私は　小休止の一時　久しぶりに見た雨と明日の人夫の喜々とした姿を想い浮べて　この雨を喜こびそして感謝した.　しかし　私達の喜こびをよそに Wadi Sawawin では悲劇が起きていたのだ.

この日の朝 Wadi Sawawin の奥にテントを構えていたベドウインの1人の婦人は　いつもと変らず　20頭ばかりの羊を連れて　狭い谷を歩いていた.　分水嶺に近いこの付近の谷は　一般に幅が狭く　見た目より傾斜が急である.　長い間こうした生活環境で生きたこの婦人は　突然襲ってきた豪雨のおそろしさを十分に知っていたにちがいないのだが　羊の餌の成長をもたらす雨に喜こび　水をおそれる心のゆとりがなかったのかもしれない.

その谷は豪雨を集め　すさまじい勢で流下するその濁流は　岩を噛み　谷底を埋めつくした土砂と大礫を呑んで　遂には　その婦人を羊もろとも押流してしまった.

第130図　Wadi Zurayb の一角に湧き出る水を飲む人夫達

いかに水量が豊富であろうとも　いかに水流が激しかろうとも　谷を挾む岩山にその難を避けることは容易であったに違いない.　しかし　岩に身体を打ちくだかれながら　濁流に押し流されて死に果てたこの婦人以外に思いもよらない事故の発生の直接の原因を知る者は居ない.　彼女の変り果てた死体は　はるか下流で　散在する羊の死体と共に　その翌日発見された.

昨日のすさまじい水の流れを信じられないように　今日のその谷は　焼けつくような強い光の下に　乾き切った素肌を見せている.　死に絶えた羊の亡骸は　間もなく　禿鷹につつかれ肉をそがれて　白骨と化すことだろう.　私には　何故に彼女が生命を奪われなければならなかったのか　分からない.　抜けるように晴れ上った空の一点を見つめながら　私は Wadi Sawawin の惨劇とその結末とを想い浮べていた.

羊を飼い育てることで生計を立てなければ生き難いベドウインの女性だけに　日頃見馴れぬ濁流におののき逃げまどう羊の群を避難させるために奔走し　身を守る心のゆとりがなかったのではなかろうか.

死の世界を想わせる荒漠たる大砂漠の片隅で　こうした事件は　突如として　秘かに起こる.

わずらわしく目まぐるしい人間社会を避けて　大自然の意のままに生きるアラビアの自然児達は　命ずるものが強いるこうした試練にあくまで耐えて　より強くそしてよりたくましく成長していくのであろう.　それにしてもベドウインとは悲しいものだ.

（筆者は　鉱床部）